

継承日本語と第二言語の狭間にいる大学生の読解プロセスに関する
ケーススタディ
A Case Study on the Reading Process of a University Student Who May Be
Considered Ambivalent Between Heritage and Second-language Speaker of Japanese

金山泰子 藤本恭子, 国際基督教大学
Yasuko Kanayama Kyoko Fujimoto, International Christian University

1. はじめに

近年のグローバル化傾向に伴い、個々の言語使用状況は多様化しつつある。個人の言語背景（生育・家庭・教育環境等）、言語能力、各自が抱える言語の問題は多様化しており、日本語母語話者、継承日本語者、第二言語学習者のそれぞれの定義、区別化も曖昧になりつつある。こうした状況を背景に、筆者らが携わる大学では 2016 年より、継承日本語話者と第二言語学習者の狭間にいると考えられる学生を対象とした入門コース(以下、入門コース)を設置している。筆者らは 2018 年より、継承日本語話者の読解プロセスに関する調査を進めてきたが、2021 年より入門コースに在籍した学生を対象とする調査に着手した。本稿では、その調査結果の一つをケーススタディーとして紹介したい。

2. 継承日本語話者を対象としたプログラムと入門コースの概要

具体的にどのような背景の学生が入門コースを受講するかを紹介する。まず、著者らが携わる日本語プログラムは、第二言語学習者のための日本語コースと継承日本語話者のための日本語コースに分かれており、継承日本語話者のコースは、2016 年以前、3 レベルに分かれていた（日本語教育課程, 2015）。しかしながら、上述したような近年の言語の多様化を背景に、継承日本語話者と第二言語学習者の狭間に位置するような学生が増加してきた。そこで、こうした学生に対応するために、2016 年に「Introduction to Japanese for First/Heritage Language Speakers 第一言語／継承語話者のための日本語入門」というコースを新たに開設した。本コースは、継承日本語話者と第二言語学習者の狭間にいると考えられる学生の初年次教育の第一歩として位置付けられており、学生らは本コース受講後、継承日本語コースへ進むか、第二言語としての日本語コースに進むかを選ぶことになる。

まず、学生らは入学時に作文とインタビューのプレースメントテストで日本語力が判定される。本コースを受講する学生の共通点は、作文においてもインタビューにおいても、第二言語学習者に見られるような文法の破綻は少なく、ネイティブネスが感じられるということである。しかしながら作文では、文字（ひらがなが多く漢字が少ない）、文体（話し言葉で書かれている）、量・構成（構成のあるまとまった文章が書けない）、語彙面（抽象語彙がない）、概念（抽象概念に欠ける）などの問題が見られる。また、判定には、学生の母語話者としての意識やこのコースを取りたいという希望なども考慮される。さらに、学生の家庭環境や教育的・言語的背景も重要な観点となる。家庭環境としては、両親あるいは片親が日本人という学生や日系の学生に加え、最近では両親とも日本人ではない

がほぼ日本で生まれ育った学生もいる。家庭内言語の状況を見ると、両親あるいは片親とはある程度日本語で話す学生もいるが、ほぼ英語を使うという学生も多く、家庭内での日本語使用頻度が低いことが特徴と言える。また両親が日本人でない学生は家庭内では日本語は使用していない。教育背景を見ると、海外現地校、国内外インターナショナルスクール出身の学生がほとんどで、補習校などにはあまり通っておらず、漢字学習もあまりしてこなかったという学生が多いのが特徴である（金山・藤本 2021）。

3. これまでの調査の概要

これまで筆者らが継承母語話者を対象とした授業現場で見てきた学生の読解の特徴として、正確に理解できていなくても、一つの点に注目して想像力を働かせたり意見を述べたり、批判したり、議論したりすることは得意である一方、精読には意欲的でなく、指示語や語彙についての質問に曖昧にしか答えられない、という傾向があった（金山・藤本 2018）。そこで筆者らは、継承母語話者を対象に、発話思考を用いて、読解プロセスを観察する調査を行ってきた。これまでの調査から見られた彼らの読みの特徴は、既存知識による推測をしたり、論調がポジティブかネガティブを探りながら理解につなげていく一方で、文化歴史的な知識が欠如しており、細かい点が読み取れないという点であった（金山・藤本 2019, 2020）。今回の調査は、継承語と第二言語の狭間にいる学生のために設置した入門コースを履修した学生を対象に実施し、これまでの調査対象者との共通点や違いにも着目してみた。

4. 調査の概要

4.1 調査対象

調査の対象は、日本国内のインターナショナルスクール出身の学生である。フィリピンに生まれ、0歳のうちに日本に移住した。両親はフィリピン人で家庭内言語は英語とタガログ語、学校や日常生活では日本語と英語を使用している。大学入学後、入門コースから始めて1年と1学期（計学期、40週間）、継承日本語話者のためのプログラムで日本語を学習した。

4.2 調査の方法

調査の方法は、テキストを音読しながら、考えたことを発話する発話思考法を用いた。さらにフォローアップインタビューを実施し、テキストの要約をしてもらい、わからなかったところや読みのストラテジーについて質問した。調査はzoomで実施し、インタビューの内容はすべて録画・文字化した。テキストは2021年7月10日朝日新聞天声人語「アメリカザリガニの規制」を用いた。典型的な起承転結の流れの文章で、文字数は613字である。内容は、「起」の部分で、外来種の例としてシロツメグサを紹介し、「承」の部分は、外来種のアメリカザリガニが、生態系を脅かしているため、環境省が規制に向けて動き出しているという内容である。「転」では、灰谷健次郎『兎の眼』の引用し、「結」では、子どもが自然に触れることと、生態系を守ることのバランスをとることが必

要だ、というまとめとなっている。このテキストを選んだ理由は、長すぎずコンパクトにまとまっており、社会的なテーマで、文化・歴史的な要素が含まれていることである。

4.3 調査の結果

調査の結果、かなり多くの読めない漢字、意味のわからない語彙があった。以下がその例である。

表1 読めない漢字とわからない語彙

読めないが意味が既習知識から推測出来た語彙	例：長崎、輸入、連れて、沼地、産卵、灰谷健次郎
漢字が読めず、意味もわからない語彙	例：盛ん、繁殖、釣った、鮮明、指定、放す、舞台、眼
わからない語彙	例：シロツメクサ、詰め物、脅かし、～ゆえか、なきよう

このように多くの読めない漢字、わからない語彙があり、対象者も「わからない」という発話を繰り返していた。読解のプロセスを観察している段階では、テキストの理解は困難に見えたが、読解終了後の要約では、テキストの大意はほぼ正確につかめていた。これは筆者らにとって非常に大きな驚きであった。

5. データ分析

5.1 対象者の読みの特徴

では対象者はどのようなストラテジーを用いて理解に到達できたのだろうか。読みの特徴を見ていきたい。

1) テキストを2回繰り返して読む。

1回目は、上から通して読み、わからない語や注目する語にハイライトしたり、メモを書き込んだりしながら読んでいた。2回目は、段落を行き来しながら、段落間の関係性に注目して、わからないところを明らかにしようとしていた。

2) 自身の読みに対するモニタリング

「わからない」「忘れた」「なんとなくわかった」「これがわかったけど、これはわからなかった」などと発話しつつ、テキストにハイライトしたり、「？」をつけたりしながら読んでいた。「わからない」ところを明確にすることにより、前後の文脈から推測して理解しようとしていた。

3) 様々な推測のストラテジー

① 漢字に関する推測

「省」がつくから政府、「次郎」は人名、「鮮」は魚が付いている・スーパーでよく見かける、などの推測をしていた。

② 語彙の関連からの推測

「シロツメグサ」とは何かがわからなかったようだが、その言葉が後に出て来る「四つ葉のクローバー」「ザリガニ」「子ども」と関係があることに注目していた。

③キーワード／キーセンテンスの推測

繰り返し出て来る言葉や、キーワードと思われる言葉を推測することにより全体の理解に近づいていた。具体的には、「生態系」「規制」という語が2回繰り返されていることから、これらがキーワードであることを推測していた。また、最後の「ザリガニが問いかけている」という文が全体を理解する上での大きなヒントとなっていた。「問いかける」と言う言葉が問題を提起する表現であり、ザリガニが問題そのものではないが、問題提起のきっかけになっていることを理解していた。

④リソースからの推測・筆者の論調からの推測

対象者が問題提起に注目した理由の一つは「新聞記事だから提言があるはず」という前提があったということである。また筆者がどのような論調でその言葉を使っているか、ポジティブかネガティブかということを探りながら読んだということだった。

4) メインポイントの発見

対象者がテキストの理解に到達できた最大の理由は、最終段落である「結」の部分を理解できたことである。対象者は「子どもたちが生き物に触れ、自然の面白さを知ること。これがメインポイント」と発話しており、この部分の理解から、他の段落でわからなかったところを関連付けて推測しつつ理解を試みている。その推測が間違っているところもあったが、結果的には、メインポイントが発見・理解できたことで、テキストの大意をつかむことに成功していた。

5.2 対象者の読みの問題点

一方で対象者の読みには次のような問題点が見られた。まず「起承転結」の「起」と「転」の部分が理解できなかったことだ。この部分とメインポイントとの関連が最後まで見出せなかった。今回調査に使用したテキストでは、「起」の部分で、江戸時代にオランダから長崎に輸入された外来種「シロツメグサ」が紹介されており、このような外来種が「四つ葉のクローバー探し」という子どもの遊びとして定着したことが例として挙げられ、本論のザリガニの話題につながっている。また、「転」の部分では、日本の小学校の国語教科書でよく取り上げられる灰谷健次郎の『兎の眼』に触れ、子どもと生き物との触れあいの大切さを表す例として紹介している。しかし対象者は、なぜシロツメグサが紹介されているのか、江戸時代とはいつごろで長崎とはどのような場所なのか、灰谷健次郎の『兎の眼』はどのような本なのか、これらの話題が本論とどう関係しているかには言及しなかった。そこでフォローアップインタビューで確認したところ、その関係性を理解できていないことがわかった。そのことから、対象者は、この「起」から「承」へのつながり、「承」から「転」、「転」から「結」へのつながりが見いだせなかったということがわかった。これは背景知識の欠落によるものだと思われる。天声人語は一般的な成人の日本人読者を対象に起承転結の流れ

で書かれており、「起」の部分では、時代・文化背景など、一般的な日本人の共通認識からイメージを想起しやすい話題から入る。また「転」の部分でも、本論から少し視点をずらしつつ、本論と関係のある話題につなげる。ここで取り上げられている話題も、一般的な日本人読者の知識や共有認識が期待されている。しかし対象者は、こうした歴史的・文化的背景に関する知識に欠けており、メインポイントはつかめても、文化歴史的な背景との関わりから来る読み物の含蓄、幅、豊かさを味わうところまでは読み込めないという問題が見られた。

6. 考察と今後の課題

これまでの調査と本調査の結果を観察したところ、継承母語話者と今回の対象者には、次のような共通点が見られた。既存知識による語彙の推測、筆者の論調がポジティブかネガティブかを探りながら読む、などのストラテジーが見られた一方で、文化歴史的な知識の欠如という問題点もあった。さらに今回の調査から得られた知見は次のようなものである。まず、対象者にとって、起承転結で書かれた文章の「起」と「転」の部分の理解が難しかったことだ。しかし、わからない語や背景知識が多くありながらも大意を理解できていたことは大きな発見であった。今回の対象者は結論の部分が理解でき、そこから内容を推測していくことで大意を読み取るという読み方をしていた。

前述したように学生の言語背景は多様であり、一つのケーススタディーから傾向を一般化することはできない。佐藤（2019）やリー・ドーア（2019）も指摘するように、海外在住の日本国籍を持ちながらも日本生まれでない子どもや、日本に帰国予定がない子どもも増加傾向にあり、日本語を継承語として育つ子どもたちの言語背景は、さらに多様化・複雑化していると言えよう。また、今回のケーススタディーで紹介した対象者のように、家庭内言語が日本でなくとも、日本で生まれ育ち、国内インターナショナルスクールで教育を受け、日本語が母語の一つであるという意識を持つ学生もいる。このような言語背景、言語感覚、母語意識を持つ者は、今後も増えていくものと予想される。こうした背景や意識が学習者の読解にどのように影響するのだろうか。上述したように、継承母語話者や第二言語との狭間にいる学習者には、日本の文化歴史的な知識の欠如というマイナス面はたしかにあるだろう。しかしながら、日本における普通教育のシステムの枠組みの中だけで育った者と比較して、多様な文化・言語社会で得た経験をテキストの解釈に活かせるというプラス面もあるのではないだろうか。今後はこのようなプラス面にも注目していきたい。

これからも継続して調査を進め、学生の背景や意識と読解プロセスとの関係を詳細に観察し、継承語教育の現場にその知見を活かしていきたい。第二言語話者との違いや共通点にも注目しつつ、文化歴史的な知識に関する教育のあり方も模索していきたい。

参考文献

- 金山泰子 藤本恭子 (2018) 「第一言語／継承語話者である大学生のための日本語読解教育－2016-2017 特別日本語教育読解授業報告－」 『ICU 日本語教育研究』 14、45-53
- 金山泰子 藤本恭子 (2019) 「継承語日本語話者である大学生の読解プロセスに関する調査－発話思考法を用いたパイロットスタディー－」 『ICU 日本語教育研究』 15、37-55
- 金山泰子 藤本恭子 (2020) 「継承語日本語話者である大学生の読解ストラテジーに関する考察－発話思考法によるデータの比較分析－」 『ICU 日本語教育研究』 16、39-53
- 金山泰子 藤本恭子 (2021) 「継承日本語と第二言語の狭間にいる大学生のための初年次教育」 CAJLE2021 大会 Proceedings 65-69 https://www.cajle.info/wp-content/uploads/2021/10/09_CAJLE2021Proceedings_KanayamaYasuko.pdf
- 佐藤郡衛 (2019) 『多文化社会に生きる子どもの教育』 明石書店
- リー季里・ドーア根理子 (2019) 「北米の日本語学校における学習者のニーズの多様化」 近藤ブラウン妃美他 (2019) 『親と子をつなぐ継承語教育』 くろしお出版 147-159
- ICU 日本語教育課程 (2015) 「2013 年度 JLP 新カリキュラム報告」 『ICU 日本語教育研究』 11, 45-95